

82 第三高等中学校医学部を卒業した“秦佐八郎”について

木村 丹

医療法人 木村医院

秦佐八郎(1873-1938)は、エールリッヒの指導のもとで合成抗菌薬サルバルサンを開発したことで広く知られているが、サルバルサンの広告を含め、三つのエピソードを発表する。

第三高等中学校医学部

鳥根県美濃郡都茂村で造酒屋の八男として生まれ、14歳で同じ村の開業医師秦徳太の養子となり、1891年(明治24)に岡山市にある第三高等中学校医学部に入学した。'88年(明治21)以前には、松江市にも公立医学校が存在したが、地方税を医学校の経営に支弁してはならない勅令により廃校となった。'91年当時の国公立の医育機関は、大学は東京帝国大学1校、高等中学校医学部は千葉、仙台、岡山、金沢、長崎の5校、公立医学校が大阪、京都、愛知の3校、計9校があり、卒業生には医術開業試験を免除された。済生学舎など数校の私立医学校も存在したが医術開業試験の合格者のみに医師免許を付与された。従って、佐八郎にとって最も近い医育機関は岡山市にある第三高等中学校医学部であり、山陰線も伯備線も存在しない時代に都茂村から岡山まで徒歩で約5日は要したと思われる。

第三高等中学校という聞き慣れない名称の医学部は、'88年(明治21)4月から'94年(明治27)9月まで6年半続いた。第三高等中学校は中学校令により'86年(明治19)大阪市に創立され、その分校として'88年に岡山県立医学校が第三高等中学校医学部に改組された。'89年(明治22)本部は京都に移転し、'94年(明治27)9月高等学校令により第三高等学校医学部となった。佐八郎は'91年に入学し95年に卒業した。周囲は郷里での開業を勧めたが、祖父宗叔(むなよし)は研究者になることを許可し、'98年(明治31)荒木寅三郎教授の推薦により北里柴三郎が主宰する大日本私立衛生会伝染病研究所に入所した。

1901年(明治34)4月、医学部は第三高等学校から独立し、岡山医学専門学校に発展した。

ドイツ留学

入所後7年間はペストの研究を続け、1907年(明治40)ドイツに留学した。その翌年から血清免疫療法を研究していたPaul Ehrlich(1854-1915)の指導を受け、人体への影響が少なく細菌を殺す色素を研究し、多数の染料を合成して試みた。'10年(明治43)、梅毒スピロヘータに対して606番目の砒素を含んだ試料が有効であることを発見し、「救う(salve)+砒素(arsenic)」からサルバルサン(一般名:arsphenamin)と名付けた。この薬剤は約30年間梅毒の特効薬として使用されたが、毒性も強く第二次大戦後はペニシリンに主役の座が移った。ちなみに、Ehrlichは、佐八郎の北里研究所における先輩志賀潔の指導者でもあり、'04年に化学療法剤“トリパンロート”を共同開発した。

サルバルサン

サルバルサンは、1911年(明治44)三共合資会社の広報誌『治療薬報』1月1日号(第67号)にその広告が掲載されている。SALVEASAN新薬606号がドイツIGフェルベン社から輸入され発売になった、とある。同年の『細菌学雑誌』には、静脈注射と筋肉注射が比較され、筋肉注射は簡単ではあるが、皮下組織の壊死が副作用として頻度が高く、手技がやや困難ではあるが静脈注射が推奨される、と記述されている。'14年(大正3)第一次世界大戦が始まり日英同盟の相手英国の要請を受け、ドイツに宣戦布告したことから医薬品輸入が途絶え、サルバルサンは国産化が始まり、三共合資会社は商品名“アルサミノール”を発売、利益を上げたことから三共株式会社に発展した。三共以外のアーセミン商会、万有合資会社、京都新薬堂もそれぞれの商品名を付けて発売した。